

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the relationship between consciousness of norms and honorific expression in Japanese :  
From the language survey of Hichiku dialect

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉岡, 泰夫, YOSHIOKA, Yasuo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001152">https://doi.org/10.15084/00001152</a>

## 敬語行動と規範意識

— 肥筑方言域における言語行動調査から —

吉 岡 泰 夫

---

YOSHIOKA Yasuo : On the relationship between Consciousness of Norms  
and Honorific Expression in Japanese : From the Lan-  
guage Survey of Hichiku Dialect

要旨：日本語の敬語は社会的規範が常にゆれているために、ことば遣いの乱れが問題になる。この問題には、敬語行動の変化とともに、規範意識の変化も関わっている。どういう場面ではどのような敬語表現を選択・付加すべきかというルールが意識の中に形成されたものを規範意識として、地域社会における敬語行動と規範意識の実態を明らかにした。敬意の高い敬語形式を使うことと、規範意識が厳格であることには相関がある。要因分析の結果、ていねいな敬語行動をする人や、敬語に気を遣う必要があると意識している人は規範意識も厳格であることが分かった。また、高学歴層や第三次産業従事者は敬語の規範意識が厳格であることが分かった。

キーワード：敬語行動，規範意識，言語変化，社会的要因，敬語意識，肥筑方言

Abstract: In Japanese, standard as well as dialectal, the usage of honorifics can cause social problems, because speakers' attitudes towards the norms of usage are constantly changing. In this paper, the relationship between speakers' choices of honorific expressions and their consciousness of linguistic norms was investigated in the area of Hichiku dialect by means of an interview survey. It was revealed that those who have a distinct consciousness of honorific usage tend to use honorific expressions of higher politeness than those speakers whose consciousness was not distinct. Also, it was revealed that speakers' educational backgrounds and professions were the principal determinants of norm consciousness.

Key words: honorific, norm consciousness, language change, social factor, attitude toward honorific, Hichiku dialect

## 1. はじめに

日本語の方言敬語体系の地域差は、複雑な順に九州方言、西部方言、東部方言、北日本方言となっている。全国の敬語調査を集大成した加藤（1973）によれば、西日本で尊敬表現の発達がみられ、特に近畿中央部や熊本などでは、いく通りもの敬語形式が併存するとされる。また、方言では一般に発達していない謙讓表現もこれらの地域には存在する。肥筑方言は九州方言の中でも敬語体系の複雑な発達がみられ、敬語の使い分けについての規範意識も厳格な方言圏である。

よそ行きの改まった場面で使うことばとして共通語が全国的に普及し、方言から共通語に切り替えること自体が丁寧な敬語行動と意識されている。また、方言の敬語形式が簡素な地域では、敬語と意識されるのは共通語の敬語形式である。しかし、九州の肥筑方言域のような方言敬語体系が複雑に発達している地域での敬語行動は、それほど単純に共通語に依存するものではない。肥筑方言域では、敬意の高い敬語形式が期待される場面で、若い世代が共通語敬語の使用が比較的多いのに対し、年齢の高い世代ではむしろ方言敬語で敬意の高い形式の使用率が高くなる（吉岡・1990a）。このような世代差とともに、方言敬語使用の地域差も大きい。それぞれの地域社会に固有の方言敬語体系があり、現実の言語生活に生きているからである。また、それは規範意識の面にも現れ、同じく分布する方言敬語形式「ス・サス」が、ある地域では目上の行為を言うのに使って適切な形式であるのに、ある地域では不適切な形式とされる。これがしばしば敬語トラブルの元になっている（秋山・吉岡・1991）。類似の現象を全国的にみると、敬語の変化か誤用かで常にゆれている、ことば遣いの乱れの問題になる。この問題には、日本語の敬語の変化とともに、規範意識の変化も関わっている。ことば遣いの問題のありかを追究するためにも、まず、敬語行動と規範意識の実態を明らかにしなければならない。

複雑な敬語形式を使いこなす敬語行動を支えているのは、表現のルールともいうべき敬語の規範意識と考えられる。また、方言敬語で厳格な規範意識

を持っていることは共通語敬語の規範意識にも転移して、高度な操作を要する形式の使用を規定していると考えられる。例えば、共通語を使う場面である葬儀の弔辞を全国的に見渡しても、方言敬語が複雑な地域の高敬意の形式が多用されるのに対し、東部・北部日本のものは敬語が簡素であるようだ。敬意の高い敬語形式を使うということと、規範意識が厳格であるということが、相関するものであるかどうか、相関分析によって明らかにしていく。

敬語はことばの諸側面の中でも社会構造との関連が深く、それぞれの社会における対人関係把握や、コミュニケーションのありかたについての社会的慣習が反映される。また複雑な敬語体系や使い分けのルールについての習熟という面でも、社会差が生じる。特に、ある場面での発話を聞いてそれを受け止める側の規範意識には、コミュニケーション行動の社会的規範が反映される。この研究では、敬語の規範意識について、調査に基づく実態を明らかにするとともに、社会的要因の面から、および、敬語使用や敬語に対する意見の面から、要因分析を行った。要因分析の方法論として、ここでは数量化Ⅰ類を適用する。

## 2. 調査の概要

面接調査は、九州のほぼ中央部、熊本を中心として肥筑方言域の86地点で実施した。県別にみると熊本県77地点、長崎県5地点、福岡県2地点、大分県1地点、宮崎県1地点となる。被調査者は各調査地点で言語形成期（5～15歳）を過ぎたことを条件にして、10代、20～30代、40～50代、60代以上の4世代それぞれに男女各1名を選んだ。1地点につき8名で、86地点を方言区画から配置した。7地点が8名を超えていて、被調査者の総数は702名である。

肥筑方言の中での方言区画にしたがって、福岡県から熊本県八代郡以北を北部、八代郡を含んだ南側を南部、熊本市を都市部、熊本県阿蘇郡から大分県・宮崎県を含んだ東側を東部、熊本県天草郡から長崎県を含んだ西側を西

部とした。被調査者数は、北部 234 名、都市部 104 名、東部 70 名、南部 149 名、西部 145 名である。

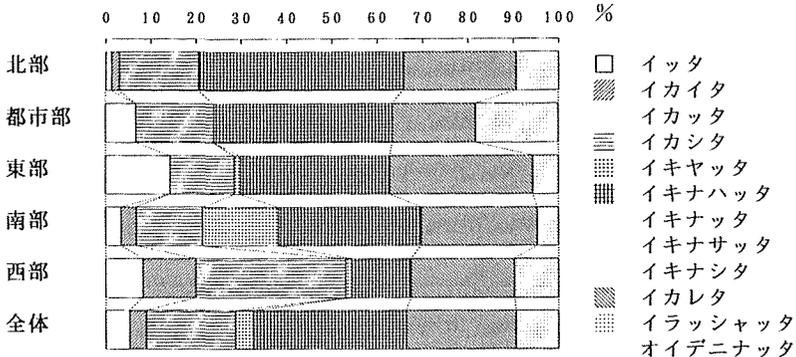
調査内容は、語彙・音韻・文法・敬語行動・言語意識・新方言の各分野の言語項目に、社会的属性項目を加えたものである。調査実施時期は 1993 年 7～9 月である。調査には熊本大学教育学部の学生 31 名、熊本短期大学の学生 27 名、広島大学大学院生 1 名が参加し、調査員総数 60 名で実施した。

### 3. 敬語使用と方言敬語の規範意識の実態

敬語使用の調査項目は、聞き手と話題の人物の組み合わせをいろいろに変えた 15 場面である。ここでは次にあげる質問項目で得られた回答のクロス集計によって、敬語使用の地域差の実態をみていく。

〔質問〕あなたが親しい友達と話しているときです。学校の校長のことが話題になって「校長は熊本に行った」と言うのに、どのような言い方になりますか。

図 1 は、親しい友達と話す場面で、話題の人物（校長）の行為を言う尊敬表現の地域差をみたものである。動詞＋助動詞の部分にかぎって尊敬の形式をみても、12 系のバラエティがみられる。方言敬語で全地域に共通して分



検定統計量 = 119.749 自由度 = 24 有意水準 = 5%  $\chi^2$  値 = 31.410  
 有意水準 5% では、関連なしとはいえません。

図 1 敬語使用 × 地域（肥筑方言域調査 1993 年）  
 親しい友達に「校長は熊本に行った」

布するのは、ス・サス系「イカシタ」と、ナハル系「イキナハッタ」、ナル系「イキナッタ」、ナサル系「イキナサッタ」、ナス系「イキナシタ」（ナハル系からナス系までまとめてナハル類）とである。地域的特色をみていくと、ナハル類が北部（45.3%）・都市部（39.4%）で優勢であるのに対し、西部ではス・サス系の「イカシタ」（33.1%）が勢力を持っていることがわかる。また、ル・ラル系の「イカイタ・イカッタ」は西部（11.7%）に、ヤル系の「イキヤッタ」は南部（16.8%）に集中的に分布する形式であることがわかる。

親しい友達と目の前にいない目上の人を話題にして話す場面であっても、肥筑方言域では素材敬語の使用率（全体で94.7%）が極めて高い。同じ場面と比べると、東京の若者層では、素材敬語が使われなくなる傾向にあることが井上（1979）に指摘されている。また、肥筑方言域では、方言形の敬語使用率（全体で61.1%）が、共通語形の敬語使用率（全体で33.6%）を大きく上回っている。これらは方言敬語が複雑に発達した地域における敬語行動の特徴と言えよう。世代差が大きくなるのは、目上の人が聞き手で、その目上の人を行為を話題にする場面である。校長に「今日は家に居るか」と尋ねる場面の調査結果をみると、若い世代が共通語敬語の使用が比較的多いのにに対し、年齢の高い世代では方言敬語で敬意の高い形式の使用率が高くなる。

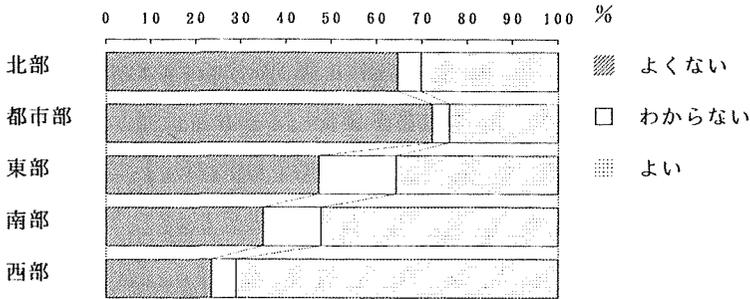
方言敬語の規範意識の調査項目は、ス・サス系の尊敬表現を使った5場面を提示し、それぞれ適切か不適切かを尋ねたものである。ここでは次にあげる2番目の項目で得られた回答のクロス集計によって、規範意識の地域差の実態をみていく。

#### 〔場面と発話〕

2. 子供が家に先生を連れて来て「おかあさん、先生のコラシタ」

〔回答〕 1. よい 2. よくない 3. わからない

図2に示した場面と発話では、話題の人物である先生の行為を言うところに、ス・サス系の尊敬語が使われている。この方言形式は西部の人が都市部・北部の人と話す場面ですばしば敬語トラブルを起こしている形式である（秋



検定統計量 = 113.548 自由度 = 8 有意水準 = 5%  $\chi^2$ 値 = 15.507  
 有意水準 5%では、関連なしとはいえません。

図2 方言敬語の規範意識 × 地域 (肥筑方言域調査 1993年)  
 子どもが先生を家に連れて来て「おかあさん、先生のコラシタ」

山・吉岡・1991)。これを不適切とする回答は都市部 (72.1%) と北部 (64.5%) で多い。先生を話題の人物として待遇するのに、ス・サス系では敬意が低いと判断されるためである。ただし、この場面では話題の人物はワキの聞き手として参加している。一方、ス・サス系を適切とする回答は西部 (71.0%) で多い。都市部とその近郊の北部は地域の中心部であり、西部 (天草郡市) は20数年以前まで船で渡るしかない周辺部であった。全域に分布する方言敬語形式「ス・サス系」が、分布域の中心部では敬意の低い形式になっているのに、周辺部では高い敬意を保っているともみることができる。このことは敬意遞減が中心部では速く進み、周辺部では遅れるということの一つの証明になろう。西部 (天草郡市および島原半島) は、天草五橋の開通 (1966年) によって交通事情が激変し、都市部・北部への通勤・通学も可能になった。人の交流が盛んになった現在では、五橋ルート沿線から「ナハル系」が浸透している。しかも、「ナハル系」は中心地熊本式の新しい品位のある言い方と意識されている。敬意遞減を補完するために、敬語の表現形式が更新されつつあるともみることができる。

#### 4. 共通語敬語の規範意識の実態

共通語敬語についての規範意識の調査項目は、次にあげる7項目である。

〔質問〕 これからいくつかの話し方をします。その場面で聞いているとして、適当でないとと思われる話し方があったら「よくない」とおっしゃってください。適当な話し方であれば「よい」とおっしゃってください。

〔場面と発話〕

1. 母親が担任の先生に「校長先生も応援に来ると言いました」
2. 社員が会議で「社長もそのように申されます」
3. 集会で司会者が「会長がお書きになられたものです」
4. 会議で司会者が「おっしゃられたとおりです」
5. テレビのアナウンサーが「政局の混乱が続きますですね」
6. 事務所の受付が部長を尋ねて来たよその会社の社長に「部長さんは今、工場にいらっしゃいます」
7. 母親が担任の先生に「うちの子はいつも7時に起こしてあげます」

〔回答〕 1. よい 2. よくない 3. わからない

敬語の規範意識に個人差が生じる原因は大きく二つ考えられる。一つは、敬語の文法的な体系が複雑であるとともに、場面による使い分けの規則も複雑であり、言語の他の側面に比べて習熟が困難であることがあげられる。いま一つは、敬語の歴史的な変遷によるもので、その体系や社会的慣習が常に変化を続けていることがあげられる。体系についてみれば、その歴史的な法則として敬意逓減の法則があるが、敬意の逓減を補完するために敬語の表現形式は更新を繰り返してきた。社会的慣習についてみれば、敬語は社会構造と密接な関連があり、社会変動や意識変革と連動して変化してきた。戦後間もなくの簡素化、経済成長と連動した商業敬語の複雑化などは、その端的な例であるが、敬語の社会的慣習は短い時間でも変化してきたことである。以上のことが、世代差など社会的属性による差を生じることになる。上の世代から「近頃の若い者はことば遣いを知らない」とか、「敬語が乱れている」という意見が聞かれるが、同様の意見は何時の時代の文献にもしばしば記さ

れており、敬語の変化、規範意識の社会差は歴史的普遍性があることが分かる。

ここで取り上げる〔場面と発話〕の1～7は、現代敬語の厳格な規範に照らせば、誤りあるいは乱れとされる例である。どのような誤りであるかについては、それぞれの項目について実態を見ていくときに述べる。これらの誤用例を提示することによって、それを許容するか、不適切と判断するか、規範意識を尋ねたものである。

敬語についての規範意識の実態を、規範意識項目の回答と、社会的属性項目とのクロス集計によってみていく。社会的属性の項目と区分は、性（男・女）、世代（10代・20～30代・40～50代・60代以上）、居住地域（北部・都市部・東部・南部・西部）、学歴（高学歴・中学歴・低学歴）、職業（第一次産業・第二次産業・第三次産業・主婦・学生・無職）とした。規範意識項目7×社会的属性項目5＝35のクロス集計を行ったが、ここでは有意差がみられたものの内、それぞれの規範意識項目でもっとも差が大きい社会的属性項目について、クロス集計のグラフを示す。

図3に示した、〔場面と発話〕母親が担任の先生に「校長先生も応援に来ると言いました」は、話題の人物である校長の行為を言うところに尊敬語が使われていない。これは敬語を使うべきところに使わない誤りと指摘される（大石・1975）例で、敬語未習熟層からしばしば聞かれる発話である。若年

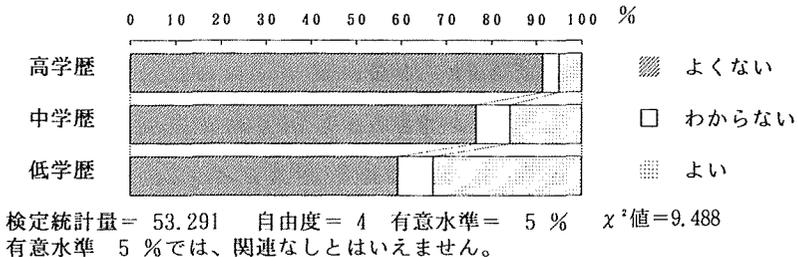
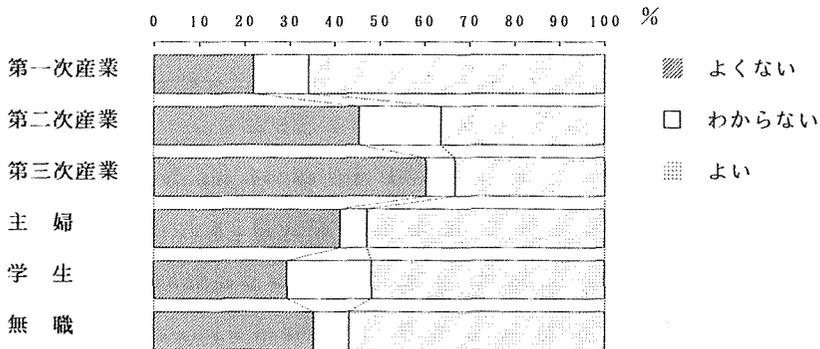


図3 規範意識 × 学歴（肥筑方言域調査 1993年）  
 母親が担任の先生に「校長先生も応援に来ると言いました」

層では、話し相手との関係では敬語の使い分けをするが、話題の人物との関係ではあまり使い分けをしないという傾向（井上・1979, 吉岡・1990 a）が調査から明らかにされている。このような素材敬語を使わない発話に対して高学歴層は高い率（91.4%）で不適切と判断しており、厳格な規範意識を持っていることが伺われる。全体的にみても、不適切とする率（74.2%）は高く、話題の人物に対して素材敬語を使わない発話は受容されていないことを示している。

図4に示した、〔場面と発話〕社員が会議で「社長もそのように申されます」は、話題の人物である社長の行為を言うところに謙讓語「申す」が使われている。これは尊敬語を使うべきところに謙讓語を使った使い分けの誤りと指摘される（大石・1975）例である。職業によるクロス集計でみると、第三次産業でよくないとする率（60.2%）がもっとも高く、第一次産業でよいとする率（65.8%）がもっとも高い。なお、わからないとする率は学生で（18.8%）もっとも高い。ここで示した発話の場面は、第三次産業の人にとっては日常的に経験する場面であり、普段から気を遣っているために規範意識が厳しい方にはたつきやすかったのではないかと考えられる。全体的にみれば



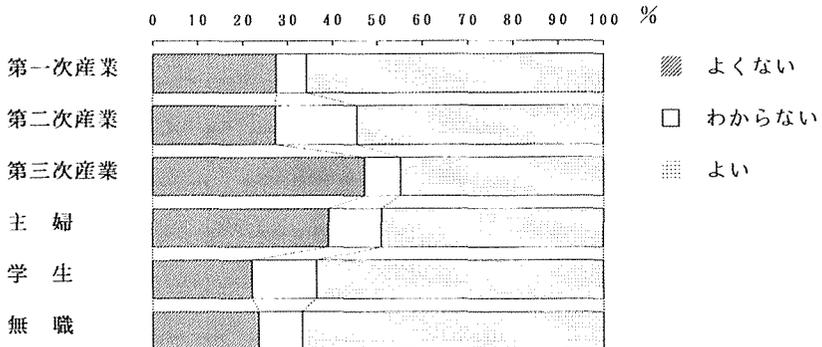
検定統計量 = 77.542 自由度 = 10 有意水準 = 5%  $\chi^2$ 値 = 18.307  
 有意水準 5%では、関連なしとはいえません。

図4 規範意識 × 職業（肥筑方言域調査 1993年）  
 社員が会議で「社長もそのように申されます」

ば、よいとする率（44.7％）と、よくないとする率（44.6％）が拮抗している。

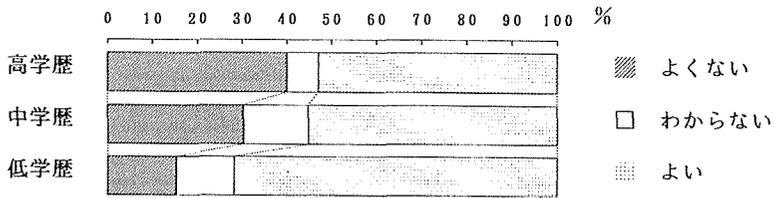
図5に示した、〔場面と発話〕集会で司会者が「会長がお書きになられたものです」は「お～になる」という尊敬の形式に、さらに尊敬語の助動詞「れる・られる」を付加したもので、二重尊敬の形式である。歴史的には、高貴な人物に対する敬意の高い形式として使われていたが、現代敬語では、使い過ぎの誤りとされる（大石・1975）形式である。職業によるクロス集計で見ると、第三次産業でよくないとする率（47.2％）がもっとも高く、よいとする率は無職（66.7％）、第一次産業（65.8％）、学生（63.5％）で高い。全体的にみると、前項の使い分けの誤りでは、よいとよくないの比率が拮抗していたのに比べて、この使い過ぎの誤りはよいとする率（54.0％）が高い。つまり使い分けの誤りに比べたら、使い過ぎの誤りである二重尊敬は受容される方向にあるということになる。

図6に示した、〔場面と発話〕会議で司会者が「おっしゃられたとおりです」は、「おっしゃる」という尊敬語の動詞に、さらに尊敬語の助動詞「れる・られる」を付加したもので、二重尊敬の形式である。これも前項の二重



検定統計量 = 44.175 自由度 = 10 有意水準 = 5%  $\chi^2$ 値 = 18.307  
 有意水準 5%では、関連なしとはいえません。

図5 規範意識 × 職業（肥筑方言域調査 1993年）  
 集会で司会者が「会長がお書きになられたものです」

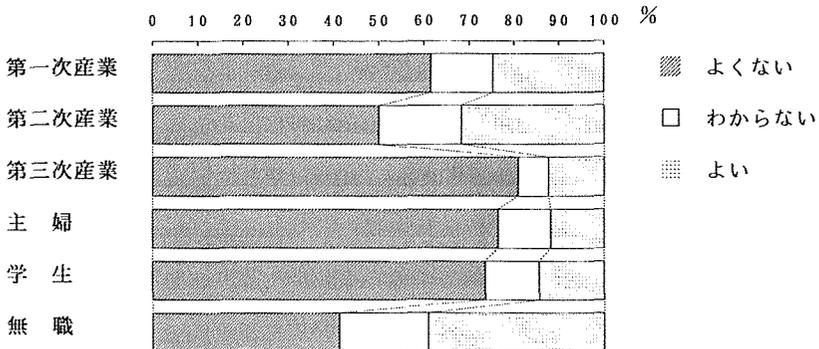


検定統計量 = 32.407 自由度 = 4 有意水準 = 5 %  $\chi^2$ 値 = 9.488  
 有意水準 5 %では、関連なしとはいえません。

図6 規範意識 × 学歴 (肥筑方言域調査 1993年)  
 会議で司会者が「おっしゃられたとおりです」

尊敬と同じく、現代敬語では使い過ぎの誤りとされる(大石・1975)形式である。学歴によるクロス集計でみると、低学歴でよいとする率(71.8%)がもっとも高く、高学歴でよくないとする率(40.0%)が比較的に高い。全体的にみると、前項と同様によいとする率が高く、ここでも二重尊敬は受容される方向にあることを示している。

図7に示した、[場面と発話] テレビのアナウンサーが「政局の混乱が続きますですね」は、丁寧語「ます」にさらに丁寧語「です」を付加した二重丁寧の形式である。これも使い過ぎの誤りとされる(大石・1975)形式であ

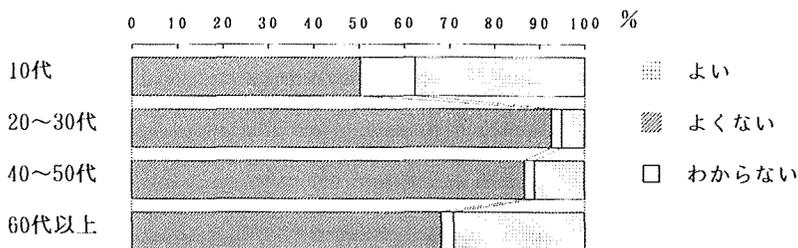


検定統計量 = 49.883 自由度 = 10 有意水準 = 5 %  $\chi^2$ 値 = 18.307  
 有意水準 5 %では、関連なしとはいえません。

図7 規範意識 × 職業 (肥筑方言域調査 1993年)  
 テレビのアナウンサーが「政局の混乱が続きますですね」

る。職業によるクロス集計でみると、第三次産業でよくないとする率（80.9％）がもっとも高く、よいとする率は無職（39.2％）や第二次産業（31.8％）で比較的に高い。全体的にみると、よくないとする率（72.8％）が高い。二重尊敬が受容される方向にあったのに対して、二重丁寧は受容されていないことを示している。

図8に示した、「場面と発話」事務所の受付が部長を尋ねてきたよその会社の社長に「部長さんは今工場にいらっしゃいます」は、表現形式は問題ないが、社会的慣習としての場面による使い分けのルールから逸脱している。現代敬語は相対敬語であるため、身内のことを外に向けて話す場面では、たとえ身内が目上であっても謙譲語を使うのが慣習である。しかし、このルール違反にも、家族のことをよその人に話すのに「うちのお母さんは」と言うのであればすぐ気がつくが、職場でとなると案外気付かれないところがあるようだ。民間会社ではあまりないことだが、学校に電話をして「〇〇先生はいらっしゃいますか」と尋ねると、だいたい「はい、〇〇先生はお部屋にいらっしゃいます。しばらくお待ちください」と返ってくる。詳しく調査してみると面白い結果が得られそうだが、学校は外に向けても身内を低めないと言うのが慣習となっている社会のようである。なお、方言では身内尊敬用法が西日本に広く分布しており、その地域の方言場面では普通に行われている



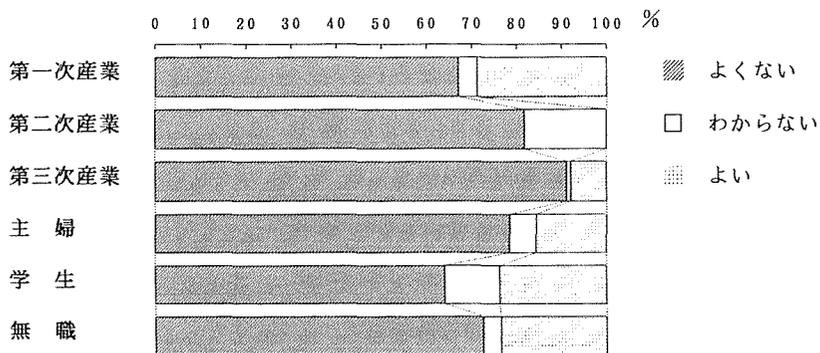
検定統計量 = 109.912 自由度 = 6 有意水準 = 5 %  $\chi^2$ 値 = 12.592  
 有意水準 5 % では、関連なしとはいえません。

図8 規範意識 × 世代（肥筑方言域調査 1993年）  
 事務所の受付が部長を尋ねてきたよその会社の社長に「部長さんは今工場にいらっしゃいます」

慣習である。この項目は全国的に見渡せば地域差が関連する可能性がある。しかし、この肥筑方言域調査では、居住地域とのクロス集計で、有意水準5%では関連ありとは言えないという結果であった。

世代によるクロス集計でみると、20～30代でよくないとする率(92.7%)がもっとも高く、40～50代の(86.6%)がそれに次いでいる。10代のよくないとする率(50.3%)と比べると大きな世代差がある。これは敬語の使い分けのルールに対する習熟ということに関係がありそうである。全体的にみると、よくないとする比率(74.5%)が高く、職場で外の人に話す場面での身内尊敬用法は受容されていないことを示している。

図9に示した、「場面と発話」母親が担任の先生に「うちの子はいつも7時に起こしてあげます」は、「起こしてあげる」と謙譲語「あげる」を使うことによって、行為者である母親がへりくだり、行為の受け手である「うちの子」に敬意を表すことになる。これは常体語「やる」を使うべきところだが、品がないので美化語のつもりで謙譲語「あげる」を使ったものである。このような謙譲語の美化語化用法は、しばしば聞かれるもので、ほかの例では謙譲語の「いただく」が、「このお魚は、塩焼でいただく方がおいしいの



検定統計量 = 80.960 自由度 = 10 有意水準 = 5%  $\chi^2$ 値 = 18.307  
 有意水準 5%では、関連なしとはいえません。

図9 規範意識 × 職業 (肥筑方言域調査 1993年)  
 母親が担任の先生に「うちの子はいつも7時に起こしてあげます」

よ」というように使われる。「あげる」の美化語化用法は、成人女性からよく聞かれるように感じるが、性とクロス集計では、有意水準5%では関連ありとは言えない結果であった。その前提でよくないとする比率を示すと、男性は75.6%、女性は82.5%であり、女性の方がより厳しくとらえている。

職業によるクロス集計でみると、第三次産業でよくないとする率(91.0%)がもっとも高く、学生(64.1%)や第一次産業(67.1%)で比較的低い。全体的にみると、よくないとする比率(79.1%)が高い。このような謙譲語の美化語化用法を誤用とみるか変化とみるか議論の別れるところであるが、この調査地域ではまだ受容されていないことを示している。

## 5. 敬語の規範意識に関わる社会的要因

これまで、敬語の規範意識の実態を7項目について、社会的属性とのクロス集計でみてきた。学歴でみたもの2項目、職業でみたもの4項目、世代でみたもの1項目であった。これらの社会的属性の中で、どの属性がどれだけ敬語の規範意識に関わっているのか、クロス集計だけでは分からない。そこで、敬語の規範意識にこれらの社会的要因がどのように寄与しているのか、数量化I類を適用して、要因分析を行った。使用したプログラムは駒澤(1982)のFORTRANプログラムである。外的基準は敬語の規範意識とし、説明アイテムは社会的属性とした。敬語の規範意識の数量データは、7項目それぞれについて、「よくない」と厳格な規範意識の回答をしたものに1点を与えて加算したものである。したがって7項目すべてを「よくない」とすれば7点、すべてを「よい」もしくは「わからない」とすれば0点ということになる。これは敬語の規範意識の厳格さ得点というべき数量データである。説明アイテムとそのカテゴリーは以下のとおりである。

〔アイテム番号〕      〔カテゴリー番号〕

- |       |          |           |           |
|-------|----------|-----------|-----------|
| 1. 性  | 1. 男     | 2. 女      |           |
| 2. 世代 | 1. 10代   | 2. 20~30代 | 3. 40~50代 |
|       | 4. 60代以上 |           |           |

- |         |          |          |          |       |
|---------|----------|----------|----------|-------|
| 3. 居住地域 | 1. 北部    | 2. 都市部   | 3. 東部    | 4. 南部 |
|         | 5. 西部    |          |          |       |
| 4. 学歴   | 1. 高学歴   | 2. 中学歴   | 3. 低学歴   |       |
| 5. 職業   | 1. 第一次産業 | 2. 第二次産業 | 3. 第三次産業 |       |
|         | 4. 主婦    | 5. 学生    | 6. 無職    |       |

表1は数量化I類による要因分析の結果である。この表から次のことが言える。レンジの大きさの順からみると、敬語の規範意識に寄与する度合いのもっとも大きい社会的属性の要因は、学歴の要因であり、次いで職業の要因の順である。学歴の要因の中でアイテム・カテゴリー数量をみると、高学歴層は敬語の規範意識が厳格であり、低学歴層は厳格でないという傾向を示している。次に、職業の要因の中でアイテム・カテゴリー数量をみると、第三次産業の人は規範意識が厳格であり、無職の人や第一次産業の人は厳格でないという傾向を示している。なお、レンジの大きさを3番目になる世代の要因の中で、アイテム・カテゴリー数量をみると、40～50代は規範意識が厳格であり、10代は厳格でないという傾向を示している。

## 6. 敬語使用と規範意識の相関

改まった場面で、どのような敬語形式を使用するかということと、敬語の規範意識が厳格であるかそうでないかということとの相関をクロス集計によってみていく。

表2は、次の敬語使用の項目と規範意識の項目とのクロス集計表である。

〔敬語使用〕 校長に「今日は家に居るか」と尋ねる場面での「居るか」の敬語形式

〔規範意識〕 母親が担任の先生に「校長先生も応援に来ると言いました」

〔回答〕 1. よい 2. よくない 3. わからない

表2でわかることは、規範意識が厳格な層は、敬意の高い形式「イラッシュイマスカ・ゴザイタクデスカ」の使用率(51.2%)が高く、尊敬語を使わない形式「オッデスカ・イマスカ」の使用率(5.2%)が低いということである。

表1 外的基準：敬語の規範意識 説明アイテム：社会的属性

アイテム番号	カテゴリー番号	頻度	数	型	レンジ	教	株	グ	ラ	フ	
1. 性	1. 男	351.	-0.207456			-30	-20	-10	0	10	20
	2. 女	351.	0.207458			I	I	I	I	I	I
2. 世代	1. 10代	173.	-0.600084		0.414914	I	I	I	I	I	I
	2. 20~30代	178.	0.213304			I	I	I	I	I	I
	3. 40~50代	178.	0.350779			I	I	I	I	I	I
	4. 60代以上	179.	0.307972E-01		0.950863	I	I	I	I	I	I
3. 居住地域	1. 北部	234.	0.203166			I	I	I	I	I	I
	2. 横浜市	103.	0.409066E-01			I	I	I	I	I	I
	3. 東部	70.	-0.194404			I	I	I	I	I	I
	4. 南部	149.	-0.154486			I	I	I	I	I	I
	5. 西部	146.	-0.103614		0.397571	I	I	I	I	I	I
4. 学歴	1. 高学歴	141.	0.573367			I	I	I	I	I	I
	2. 中学歴	346.	0.158881			I	I	I	I	I	I
	3. 低学歴	215.	-0.631711		1.20508	I	I	I	I	I	I
5. 職業	1. 第一次産業	72.	-0.618565			I	I	I	I	I	I
	2. 第二次産業	22.	-0.422684			I	I	I	I	I	I
	3. 第三次産業	325.	0.405187			I	I	I	I	I	I
	4. 主婦	51.	-0.209395			I	I	I	I	I	I
	5. 学生	181.	-0.179719			I	I	I	I	I	I
	6. 無職	51.	-0.679236		1.08442	I	I	I	I	I	I
重相関係数						0.49631					
平均予測誤差						1.64708					
						( * = 0.020534 )					

表2 敬語使用 × 規範意識 (肥筑方言域調査 1993年) 人数 ( %)

敬語使用 規範意識	1. オッデスカ イマスカ	2. オラスデスカ オイヤッデスカ	3. オンナハッデスカ オンナッデスカ	4. オラレマスカ
全 体	48 ( 6.8%)	41 ( 5.8%)	148 (21.1%)	140 (19.9%)
よ い	16 (12.0%)	13 ( 9.8%)	36 (27.1%)	26 (19.5%)
よくない	27 ( 5.2%)	26 ( 5.0%)	103 (19.8%)	98 (18.8%)
わからない	5 (10.4%)	2 ( 4.2%)	9 (18.8%)	16 (33.3%)

敬語使用 規範意識	5. イラッシャイマスカ ゴザイタクデスカ	合 計	検定統計量 = 30.825 自由度 = 8 有意水準 = 5% $\chi^2$ 値 = 15.507 有意水準5%では、関連 なしとはいえません。
全 体	325 (46.3%)	702 ( 100.0%)	
よ い	42 (31.6%)	133 ( 18.9%)	
よくない	267 (51.2%)	521 ( 74.2%)	
わからない	16 (33.3%)	48 ( 6.8%)	

図10は、次の敬語使用の項目と規範意識の項目とのクロス集計の結果である。

〔敬語使用〕先生に「校長は熊本に行った」と言う場面での「行った」の敬語形式

〔規範意識〕母親が担任の先生に「校長先生も応援に来ると言いました」

〔回答〕 1. よい 2. よくない 3. わからない

図10でわかることは、話題の人物に尊敬語を使わない言い方を「よくない」とする規範意識が厳格な層は、共通語の尊敬語形式「イカレマシタ」(41.5%)や「イラッシャイマシタ」(11.1%)の使用率が高いことである。また、比較的敬意の高い尊敬語形式の使用率は、「よくない」層、「よい」層、「わからない」層の順に低下している。しかも、尊敬語を使わない「イキマシタ・イッタデス」の使用は、「わからない」層(25.0%)でもっとも多く、「よい」層(12.8%)がそれに次いでいる。

以上の結果から、敬意の高い敬語形式を使うということと、規範意識が厳格であるということは相関するものであることがわかる。

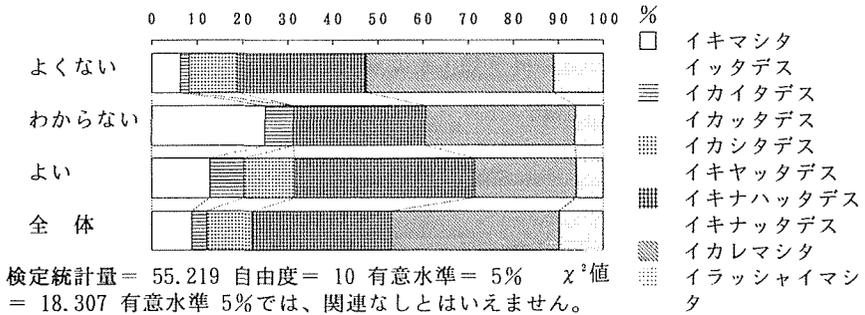


図 10 敬語使用 × 規範意識 (肥筑方言域調査 1993 年)  
先生に「校長は熊本に行った」  
母親が担任の先生に「校長先生も応援に来ると言いました」

## 7. 敬語の規範意識に関わる敬語行動の要因

敬語の規範意識と相関する要因には、様々な対人関係場面で、どのような敬語形式を使うかといった敬語使用や、敬語に対してどのような意見を持っているかといったことも、関わってくると考えられる。それらをここでは敬語行動の要因とすることにする。そこで、敬語の規範意識にこれら敬語行動の要因がどのように寄与しているのか、数量化 I 類を適用して、要因分析を行った。外的基準は敬語の規範意識とし、説明アイテムは敬語使用と敬語に対する意見とした。説明アイテムとそのカテゴリーは以下のとおりである。

( ) アイテム番号 [ ] カテゴリー番号

(1) 校長に「今日は家に居るか」と尋ねる場面で使用する敬語形式

- [1] 尊敬語なしの形式 (オッデスカ類・イマスカ類)
- [2] ス・サス/ヤル形式 (オラスデスカ類・オイヤッデスカ類)
- [3] ナハル/ナル形式 (オンナハッデスカ類・オンナッデスカ類)
- [4] レル・ラレル形式 (オラレマスカ類)
- [5] 尊敬語動詞形式 (イラッシャイマスカ類・ゴザイタクデスカ類)

(2) 友だちに校長のことを「熊本に行った」と話す場面で使用する敬語形式

- 〔1〕 無敬語形式（イッタ類）
  - 〔2〕 ル・ラル形式（イカイタ類・イカッタ類）
  - 〔3〕 ス・サス／ヤル形式（イカシタ類・イキヤッタ類）
  - 〔4〕 ナハル／ナル形式（イキナハッタ類・イキナッタ類）
  - 〔5〕 レル・ラレル形式（イカレタ類）
  - 〔6〕 尊敬語動詞形式（イラッシュヤッタ類・オイデニナッタ類）
- (3) 先生に校長のことを「長崎に行った」と話す場面で使用する敬語形式
- 〔1〕 尊敬語なしの形式（イキマシタ類・イッタデス類）
  - 〔2〕 ル・ラル形式（イカイタデス類・イカッタデス類）
  - 〔3〕 ス・サス／ヤル形式（イカシタデス類・イキヤッタデス類）
  - 〔4〕 ナハル／ナル形式（イキナハッタデス類・イキナッタデス類）
  - 〔5〕 レル・ラレル形式（イカレマシタ類・イカレタデス類）
  - 〔6〕 尊敬語動詞形式（イラッシュイマシタ類・オイデニナリマシタ類）
- (4) 態度や気持ちがていねいであれば、敬語にはあまり気を遣う必要はない。
- 〔1〕 そのとおりだと思う。
  - 〔2〕 そうは思わない。
  - 〔3〕 どちらとも言えない。
- (5) 敬語に気を遣っていると、自分の意思が正確に伝えられない。
- 〔1〕 そのとおりだと思う。
  - 〔2〕 そうは思わない。
  - 〔3〕 どちらとも言えない。

表3は数量化I類による要因分析の結果である。この表から次のことが言える。レンジの大きさの順からみると、敬語の規範意識に寄与する度合いのもっとも大きい敬語行動の要因は、アイテム番号3の敬語使用の要因であり、次いでアイテム番号4の敬語に対する意見の要因である。アイテム番号3の中でアイテム・カテゴリー数量をみると、敬意の高い尊敬語動詞形式を使用する人は敬語の規範意識が厳格であり、尊敬語なしの形式を使用する人



は厳格でないという傾向がみられる。つまり、ていねいな敬語行動をする人は、厳格な規範意識を持っているという関連を示している。次に、アイテム番号4の中でアイテム・カテゴリー数量をみると、「態度や気持ちがていねいであれば、敬語にはあまり気を遣う必要はない」という意見に反対の人は規範意識が厳格であり、賛成の人は厳格でないという傾向がみられる。つまり、態度や気持ちだけでなく敬語にも気を遣う必要があると意識している人は規範意識も厳格であるという関連を示している。

## 8. おわりに

どういう場面ではどのような表現を選択・付加すべきかというルールが意識の中に形成されたものを、ここでは規範意識ととらえてきた。今回の分析結果は、規範意識の厳格さが高度な敬語形式の使用の裏付けになっていることを示唆している。換言すれば、複雑な敬語形式を場面に応じて使いこなす敬語行動を支えているのは、表現処理のルールともいべき敬語の規範意識であることがわかる。個人の規範意識は、敬語の社会的慣習、社会的規範を習得することによって形成されるものである。当然のことながら、習得の社会環境によって差が生じる。規範意識の社会差を、これまでの敬語行動研究で明らかになった敬語使用の社会差と照らし合わせてみる。ていねいな敬語形式の使用という面では、江川(1973)によって、①女性の方が男性よりていねいである、②20~30代の方は他の年齢の人よりていねいである、③学歴や階層の上位者ほどていねいな敬語形式を用いる、などが明らかにされた。江川の③は規範意識の厳格さにおいても全く共通する社会差である。敬語の表現処理のルールに対する習熟は、使い分けの能力とも関連する。野元(1957)によれば、①学歴・年齢・階層・性の順に使い分けの能力(幅の広さ)に関係すること、②男は30代、女は20代で使い分けの能力は最高に達することなどが指摘されている。また、吉岡(1990b)によって、発話文のていねいさは職業にもっとも関係することが明らかにされた。敬語の規範意識についての社会的要因の分析においても、学歴や職業は大きく寄与する要

因であった。敬語の規範意識においても敬語使用においても、同じような社会差が生じているという点は敬語習得の環境としても問題である。これからの敬語やことば遣いの問題を考える上でも、一つの課題となるであろう。

#### 参考文献

- 秋山正次・吉岡泰夫 1991 『暮らしに生きる熊本の方言』 熊本日日新聞社  
井上史雄 1979 「若者の敬語行動」『言語』8-6 大修館書店  
江川 清 1973 「階層と敬語」『敬語講座6 現代の敬語』 明治書院  
大石初太郎 1975 『敬語』 筑摩書房  
加藤正信 1973 「全国方言の敬語概観」『敬語講座6 現代の敬語』 明治書院  
駒澤 勉 1982 『数量化理論とデータ処理』 朝倉書店  
野元菊雄 1957 「敬語の使い分けの能力」『言語生活』70 筑摩書房  
吉岡泰夫 1990a 「高校生のことばの特徴－獲得と消失－」『日本語学』9-4 明治書院  
吉岡泰夫 1990b 「発話文のていねいさの数量化」『行動計量学』18-1 日本行動計量学会

#### 付 記

この調査にこころよくご協力いただいた、被調査者の皆様のご厚意に感謝申し上げます。数量化 I 類の FORTRAN プログラムは、統計数理研究所の駒澤勉教授ご開発のものを使用しました。謹んでお礼申し上げます。